

「日本のこころ」の源流を探り
世界に向けての日本の構想（ビジョン）を共創する
（案）

令和2年12月28日
一社世界のための日本のこころセンター

当センターでは、2020年5月～12月にかけてオンライン研究会「世界のための日本のこころ研究会」を開催し、概略以下のような今後の活動指針のとりまとめを行いました。

コロナ後の世界のメガトレンドは、政治経済の面でも、技術トレンドの面でも、また、地球環境の面でも、時代を画する変革によりその構造が一新することが必至と思われます。世界から日本への期待が高まっている中で、最も対応に逡巡しているのが私達日本人自身ではないかと考えます。若い世代の生きる自信の源となる自己肯定感は低いままです。

「不易と流行」と言われるように、根無し草のように「流行」を追うのではなく、自らの伝統（不易）の要素を再確認し、確信をもって、その上に新潮流（流行）を把握して、確固とした「創造」につなげていくことが必要です。

今後、私達は「日本のこころ」の源流にある以下のような諸要素を再確認するとともに、その基礎の上に、コロナ後の世界に向けた日本発の構想（ビジョン）の共創とその具現化に向けて、世代を超えた対話と学びの過程を通じて、さらに歩を進めていくことが必要であると考えます。

I 「日本のこころ」の源流の再確認とその世界に果たす役割

1. 日本のこころ

日本人は、独特の風土と恵まれた自然環境の中で、長い古代文明の時期（縄文期）を経て、豊かな精神文化（日本的霊性）を育んできました。それは世界に偏在するアニミズムの要素をもつ古神道となり、その上に仏教や儒教のエッセンスが習合し（取り入れられ）、自然観と美意識を柱とする「日本のこころ」を形成するものとなったと考えられます。

2. 真我とは

人間のこころには、生命体としての生存本能や強い自己愛に向かう要素があると同時に、一方では他者や自然や環境全体を大事に思う利他心（慈悲心）も併せ備わってい

ます。「日本のこころ」は、歴史上前者が勝ち過ぎた対外戦争の一時期があったとしても、本来的には、後者の要素を強く持っており、利己心（小我）を超えて真・善・美（大我、真我）を希求し、世界・人類の全体最適を願うものであると考えられます。

3. 世界の危機に果たす役割

世界では、経済的軍事的な覇権を求める動きが強くなっており、個人としても自己益の追求を第一とする考えが目立ち、社会の分断や格差の拡大、宗教・政治紛争の拡大、地球環境の破壊等々の動きが急になっていますが、世界・人類の平和、共存、繁栄のために、全体の価値に常に心を配る「日本のこころ」が果たす役割は極めて大きいと考えます。

4. 地球環境の保全

自然との共生を重視し身心や環境の清浄を貴ぶ「日本のこころ」は、「人新世の時代」に破壊されつつある地球環境の保全に向けて、大きな貢献を果たしていく必要があります。

5. 思想・宗教・人種等の諸対立の包摂

諸対立を包摂する力を持つ「日本のこころ」は、世界の文化や政治、経済、宗教、人種等の対立を、破壊ではなく、新しい共栄の方向に導く役割を果たす必要があります。

6. より良い個人の生き方を求める

日々の生活を大事にする「日本のこころ」は、「今」の時間を大事にし、日々の生活の秩序を整え、豊かにし、幸福なものに変えていく力があります。価値創造につながる新しい人間の働き方、生活の仕方の提案、生活の中で異質なものを共存させていく智慧の発揮等が期待されます。剣道、弓道、合気道等の武道は、勝ち負けを争うスポーツではなく、個々人の生き方を支える武士道精神による人間形成の道となっています。

7. 和の政治

独特の風土と豊かな自然の中で、長い縄文時代を経て形成された、戦いの少ない和の政治は、仏教や儒教の思想も取り込んで聖徳太子の十七条の憲法に見られる律令国家の形となり、その後の武士道に裏打ちされた武家政治を経て、明治維新に到るまで、日本の国内政治の基調となつてつながっています。内戦は数は多かつたとしても、多くの場合、敗者の生き残りを許し、その遺伝子、伝統、文化は、絶滅することなく、後代に生かされて来ています。幕末の大政奉還の過程や明治国家の民主主義や代議制の採用も、西洋文明の影響によるばかりではなく、聖徳太子以来の和の政治の伝統が貫かれてきた結果とも言えます。

8. 和の文化

俳句や和歌等の日本文学、浮世絵等の日本画、彫刻や陶芸品・工芸品、能や文楽、茶の湯等の芸事、和食文化、和様建築等々の日本文化は、その裏にある「日本のこころ」の顕現として、世界の文化の多様性に貢献するものといえます。

9. 和の産業・経済

日本の産業・経済を支えるエートスは、士魂（武士道）経営（個の主体性と自己犠牲を厭わない全体価値追求のバランス）、モノづくりの精神、三方良しの商業道徳、ボトムアップの主体的取組等であり、鎌倉時代の宗教改革も影響して、それ以来今日の産業にまで繋がっているものがあります。SDGs 経営が求められている今日、世界の産業は株主第一主義から全てのステークホルダー（関係者）への貢献に舵を切り替える必要があります、本来の日本型経営に見られる公益資本主義（論語と算盤・公益と私益のバランス）こそ、向かうべき方向ではないでしょうか。

10. 日本語を生かした世界への貢献

大和言葉は（例えばタタミゼ効果に見られるように）「日本のこころ」と一体不可分の言語であり、日本のこころの文化が世界の多様性を支える役割が大きいとするならば、教育や社会の取組の中で、日本語の豊かさは伝承され、普及され、保護されなければならないと考えます。日本語（国語）教育の在り方についても、読まれるべき言葉の伝承が重要であり、話し言葉の音を書きあらわした書き言葉中心（「表音主義」重視）の戦後教育を大きく改め、「読む国語」、日本近代文学等を読みつぎ、文化を読みつぐ国語教育の重視が必要ではないでしょうか。同時に世界とのコミュニケーションのために日本人が世界語（英語）を学ぶ必要性が拡大していますが、他方でグローバルな日本語の存在意義はますます高まっており、外国人にとって学びやすい日本語教育のあり方もさらに改善が求められます。

11. 日本型リベラルアーツの再構築に向けて

世界は文明崩壊のリスクを高めつつあり、今後の人類は人間のあり方を極める「統合智」を発揮して、AI の力を道具として使って危機を克服する必要があります。そのために統合智をもたらすリベラルアーツ教育がますます重要となっており、世界ではその方向への改革が進みつつありますが、日本ではこのような潮流に大きく遅れています。とくに官民のリーダー層には、専門人材に加えて所謂「人物」が必要となり、「日本のこころ」を体現したリーダー養成は喫緊の課題と考えられます。そのためにも教育改革の方向として、デジタル×AI のための理系教育に止まらず、日本型リベラルア

ーツ教育の再構築が待ったなしの状況にあると考えます。

12. 人工知能（AI）の時代に果たす「日本のこころ」の役割

人工知能社会が高度化すればするほど、リベラルアーツ的な人間力がそれに付加されなければならなりません。新しい価値を生み出すイノベーションのためには、実践智と感性・直観力を育てる必要があります。東洋哲学や「日本のこころ」が果たす役割は大きいと思われます。日本社会の構成員のすべてにとって、デジタル×AIの時代を幸せで豊かなものにするためにも、日本型リベラルアーツ教育により「日本のこころ」を再確認する学びの過程が必要と考えます。

II コロナ後の世界・社会に向けて、直ちに取り組むべき諸提案

世界は、明らかにこれまでとは違った価値観、生き方が求められる時代の転換期に入ることになると考えられます。

当面必要なことは、次世代が過去を学び、その土台の上に新しい時代に立ち向かう、確固とした構想（ビジョン）を構築する環境を整備することです。そのために早急に検討されるべき提案を、幾つか例示してみます。

1. 日本型リベラルアーツの再構築

(1) 日本型リベラルアーツとは

専門智に対して統合智を追求するという意味ではギリシャ哲学に由来する欧米のリベラルアーツ（自由で能動的市民となるための基礎的教養）に対応するものですが、日本の長い歴史の中で蓄積されてきた教育・研究のシステムとして、次のような要素を組み込む必要があるという意味で、敢えて「日本型」と冠しました。

- ① 欧米のリベラルアーツ教育のようにエリート育成を目指した高等教育中心のものではなく、初等中等教育段階から全ての国民が学んでいくべきもの。いつの時代も国民の間に知的格差が少なく、次々とリーダーが国民各層の中から周流して育つ社会構造をもっていることを大事にしていくことが重要。
- ② 教育の内容としては、歴史、古典、文学、芸能、美術、音楽等々に及ぶが、「日本のこころ」の諸要素を確認できるようなものである必要。
- ③ 学ぶべき対象も、知識や論理だけでなく、感性、直感、身体的理解（身体智）も重視。具体的には座学の授業よりも対話と体験を重視し、清掃、礼

儀作法や芸能、武道の型のように、身体的理解から入ることも重要。教育手法も、学ぶ側の関心による主体的な学びを、同一学年世代だけでなく年齢混合で多世代縦断型のフラットの関係を重視するものへ。

(2) 日本型リベラルアーツの再構築の具体様

- ① 日本の大学、高等教育において、専門課程の前段階のリベラルアーツ教育について一層の拡充が必要であると同時に、むしろより重要で急ぐ課題は、幼児、初等中等教育段階からの、身体性、感性、直感を重視した組織的体系的なリベラルアーツ教育の導入だと考えます。
- ② 変化が遅い国公立の公教育の改革の前に、私立学校、さらには私塾において改革を進め、江戸期の寺子屋や藩校のように全人教育を行う機会の整備が望まれます。(公教育のアフタースクールを活用も含めて)
- ③ 私塾については、現在数多ある受験で求められる専門知識や論理習得が中心の「進学塾」に対して、これと全く異なるアプローチをする「統合智を確立し、人間力を極め、自由で責任ある人格の養成をめざす」私塾としての「日本型リベラルアーツ塾」(仮称として「自啓共創塾」《略して啓創塾》)を推進する必要があるのではないのでしょうか。
- ④ 準備中の当センター主催の次期自啓共創塾は小さな最初のステップです。その教材の普及、講師、カタリストの養成を通じて、企業人材研修や教育機関、色々な私塾等との連携もすすみ、早期に「リベラルアーツ塾」(「啓創塾」、下記⑤の「親子啓創塾」も含む)の全国的な展開が期待できないかと考えます。
- ⑤ Co-musubi (一社ダイアログ・ラーニング・設立準備中)は、「日本型リベラルアーツを学ぶ親子塾」のさきがけであり、オンラインでの生徒、親、教師が共に学ぶ家庭をプラットフォームとする新しい社会教育のカタチ(「親子啓創塾」)です。今後、講師やカタリストの養成を通じて、その全国展開の支援がなされることが期待されます。

(補足) 「啓創塾」と「進学塾」(カッコ書き)の教育手法の違い

年齢混合、多世代縦断のフラットな関係重視	(教師+同年代生徒だけ)
手法は自然や現実社会、個人の状況からの帰納	(教師、教科書からの演繹)
主体的かつ多方面に広がる学び	(教師による教壇からの授業)

対話と体感の重視	(座学中心)
学ぶのは統合智	(専門智の重視)
感性、直感、身体性と知性の融合	(知識と論理の重視)
総合的な人間力重視	(専門分野の能力重視)
過去の社会の智慧(不易)の上に新知識(流行)を学ぶ	(現代知識が中心)
全体最適の利他的価値観も重視	(自己利益、金銭価値重視の価値観に陥る)

2. 人類共通善研究センター、世界アジア文化研究所の提案

(1) 人類共通善研究センター

世界の政治・社会の分断と不安定化の現状に鑑みると、世界の人びとの前向きで建設的な協力関係を拡大する人類「共通善」の確認のための研究・協力が、最適のテーマではないかと考えられます。「日本のこころ」は、独自の自然観を支える神道的な要素に、インド発の仏教や中国発の儒教も習合して形成されてきましたが、遠くはギリシャ哲学やイスラム、キリスト教的背景を持つ西洋哲学等ともつながる、普遍性も有しています。これを母体に日本が「人類の共通善」を考える場を世界に提案することは、対立と分断のマイナス情報が氾濫する世界の現状に照らし、最もふさわしい行動ではないかと考えられます。

(2) アジア・世界文化研究所

欧州には、Brexit 等政治経済できしむ EU や、あらたな東西対立の兆しもある NATO の存在とは別に、ヨーロッパ評議会 (Council of Europe) が、法の支配や人権、文化的協力の面で、問題の英国、トルコ、ロシア等を含む 47 か国をメンバーとして維持しながら、重層的に存在しています。アジアにおいても、各国の学生を含む若い世代が交流・参加する、民間組織 (大学、学界、産業界) が主体となる「アジア・世界文化研究所 (仮称)」のような国際機関が、日本の提案で設置されることが強く期待されます。

3. 地球と人間についての世界共通教育の提案について

一般社団法人グローバル教育研究所が中心となって進める、世界の分断を日本からくいとめる世界共通教育の提案 (世界のこどもの義務教育の 15% に世界共通の地球と人間についての学びを導入しようという提案) については、人類普遍性を持つ「日本のこころ」に根ざしたビジョンでもあり、可能な限りの協力・支援が望まれます。

4. ウェルビーイング（幸福）に関する新しい国際基準の作成の提案

公益財団法人 Well-being for Planet Earthが進める、国際的な連携を取りながら、日本の若い世代が驚異の行動力で取り組んでいるウェルビーイング（幸福）に関する新しい国際基準の作成プロジェクトは、世界人類に貢献することが出来る素晴らしい「日本のこころ」に根ざした取組であり、可能な限りの協力・支援が望まれます。

（本研究会の今後の予定）

- (1) 第一期の本研究会はこれで終了しますが、今後は上記の提案等をフォローアップするため、世界のための日本のこころセンターの顧問会議ともども、研究会としても年数回程度は継続的に開催を予定したいと考えます。今後の課題として、海外を巻き込んだ検討と発信、情報センターとドゥータンクに向けた検討等。
- (2) 討議用資料改訂版の完成とともに、2021年春に発足する自啓共創塾（数名の塾長体制）には、本研究会の参加メンバー、アドバイザーの方々にも事情が許す範囲で適宜講師等をお願いしたいと考えます。
- (3) また、一般社団法人浩志会では、2021年2月から『日本のこころ』の源流を探り未来を共創する懇話会」が開設され、多世代縦断型、官庁や大企業に限らない異業態横断型のオープンな交流の場を、会外の各界の方々や中高大学生の参加も視野に入れてスタートする予定とされます。
- (4) 当センターは、東京逍遥塾、下中記念財団、匠の技、日本道、メキキの会（志教育）、グローバル教育研究所、縄文道研究所、地球産業文化研究所等、多くの目標を概ね共有できる諸組織と、相互に連携し、官民の他の組織にも働きかけて、結果として上記の諸提言が早期に実現するよう努めて参りたいと考えます。